

未来を拓く科学大好き教育 通信

郷土博物館 特別研究員 指導課 特別指導員
岩波 英一

「理科室のおじさん」を訪ねて

その23 日立市立助川小学校

日立理科クラブの「理科室のおじさん」、関幸一さんを訪ねました。関さんは、助川小学校を担当して5年目です。出身は現在の長野県上田市で、合併前は塩田町だったそうです。塩田町は、盆地で雨が少なかったため、稲作のために必要な水を確保するために、ため池が多かったそうです。そのため池は、夏にはプールに、冬にはスケート場に様変わりし、よく遊んだということでした。「私の実家は養蚕農家で、桑畑がたくさんあり、家の中は蚕だらけでしたよ。」と、小さいころを思い出しながらお話をしていました。今は、桑の木はリンゴの木になり、養蚕農家はまったくないそうです。

高校卒業と同時に、日立製作所日立工場に入社し、機械設計部に配属され、鉄板・レール・ワイヤーなどを作る圧延プラントに関する仕事に従事していました。また、圧延プラントの売り込みに従事し、世界中の市場をターゲットに海外出張を繰り返していたそうです。ブラジル、インド、南アフリカ、ヨーロッパの各国、イラン、台湾、中国、韓国など多くの国に出かけました。パスポートを調べてみたら、146回の海外渡航記録があり、1295日間海外の地にいたそうですから、すごいですね。「いろいろな国に出かける機会がありましたが、水一つとっても、やっぱり日本が一番過ごしやすいですね。」と、しみじみ日本の良さを語っていました。「特に印象的な国として、私が関わった当時の南アフリカは、アパルトヘイト(人種差別)の強い国

で、子どもたちの悲慘さには、目を覆いたくなる場面に遭遇することが多かったですよ。」と、若かったころの自分を思い出し、人間の存在の大切さをかみしめている様子がとても印象的でした。

助川小学校では、子どもたちとの触れ合いを大切にしており、休み時間などは理科室を開放するなど、科学の広場の子どもたちの活動に目を細めている様子が伺えました。また、「小学生の210の疑問」という、子どもたちの目線の疑問に答える問答集を作成したそうです。今、そのファイルは図書館に置いてあります。まだ子どもたちの目に触れる機会は少なく、活用の様子は分からないようですが、これからの子ども疑問に答えていきたいとのことでした。

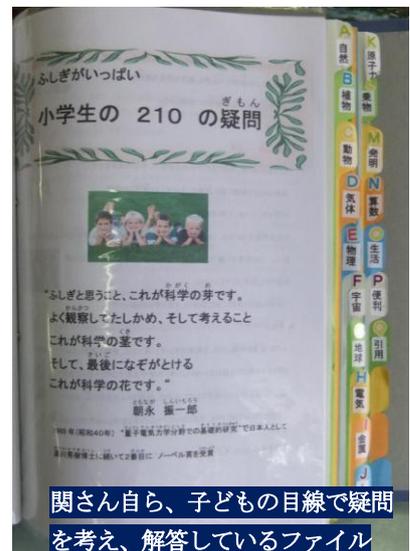
訪問時、関さんは5年生の理科の授業に支援という形で参加していました。子どもたちの活動の中に自然に溶け込んでおり、助川小学校の理科室には欠かせない存在の「理科室のおじさん」です。これからの活躍にも、大いに期待したいですね。



理科室のおじさん・関幸一さん



H25,10,1 5年 理科室にて



関さん自ら、子どもの目線で疑問を考え、解答しているファイル

— 問い合わせ先 —

Tel 0294(34)1126 FAX 0294(34)5777
内線電話 8954

E-mail:hakubutsukan1@city.hitachi.lg.jp
日立市郷土博物館 岩波 英一